

令和4年度
入学試験問題

第1回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

森村学園中等部

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

割り箸は林業と切っても切れない関係にある。(中略) 実は、割り箸こそ日本の林業の真髄であり象徴とも言えるのだ。

(中略)

林業といえ、チェーンソーで木を伐っている映像ばかり思い浮かべがちだ。そして自然破壊だと連想する。

たしかに木材を得るためには、生えている木を伐らねばならない。生きた木を倒すということは木の生命を奪うということだ。しかし、日本の林業は大半が育成林業であり、伐採の前に長い時間をかけて木を育ててきたことを忘れていない。伐採は、そうして育てた木の最後の収穫行為なのである。畑を耕して、種をまき、草取りもして、病害虫から守り、ようやく育てた米や野菜を収穫するのと同じだ。稔った稲穂を刈り取ったら、あるいは畑でダイコンを引き抜いたら「自然破壊だ」と叫ぶだろうか。

ただ農業と林業が違うのは、その育成期間の長さである。農作物なら種子を播いてから収穫まで数カ月、長いものでも数年だ。果樹の場合も多少延びるが、それでも数十年。実がなるまで育てば、その後はほぼ毎年収穫できる。しかし木材が収穫できるまで植林してから短くても四〇年、長いところでは一〇〇年を超える。若いころに植えた木を老齢の域に達してようやく収穫できる、もしかしたら収穫は子供か孫の代になるかもしれないのが林業だ。植林を投資とすると、伐採は資金の回収と利潤を得る行為に当たるが、その期間が非常に長い。だから現代①の社会的経済に馴染まないという意見もある。

しかし、本来の林業はそうではなかった。

割り箸の故郷でもある吉野林業を例にとってみよう。特徴的なのは、植える本数だ。一ヘクタール当たり八〇〇〇本から一万二〇〇〇本もあるのだ。現在の一般的な植栽本数が、三〇〇〇本を基準としていることを考えれば、非常に多いと言えるだろう。密植すると、幹が通直になって枝も出づらく節を作らない効果があるから行うのである。

もちろん高密度のまま植えっぱなしにしては、苗は育たない。そこで頻繁な間伐が行われた。植えつけ後一〇年くらいから弱度の間伐を繰り返して、徐々に本数を減らしていく。だいたい八〜一〇回以上の間伐を経て、最後は大径木になった一〇〇本くらいを残す。この時点で一〇〇年以上上たっているのである。最後の木を伐るのが主伐だ。もし主伐しか収入にならないのなら、植えた苗の数の八〇分の一以下しか収益につながらないことになる。

だが、そうではなかった。吉野林業というのは、主伐だけでなく、間伐も大きな収入源だったのだ。なぜなら間伐材をちゃんと商品化したからである。

植栽後一〇年目の細い間伐材もちゃんと利用した。たとえば足場丸太や稲穂の干架用に販売していた。もう少し太くなると、薄い板や小角材に製材した。樹齢三〇年〜四〇年の間伐材は、磨き丸太にした。床柱にすると、非常に高価格商品となった。

いや、間伐材だけではない、スギ皮は屋根葺き材になったし、スギの葉を乾燥して粉にしたものが線香の材料に回された。^③ 森の産物を徹底的に利用し尽くすことで収入を上げるのが、林業だったのである。

植えてから一〇〇年間収入がないわけではない。むしろ一〇年後から始まる間伐材収入で、最初の植え付けや下刈り経費などは全部賄える。当然、山村の人々の雇用も途切れることなく続く。最後に残された大径木の主伐はボーナスのようなもので、山里に大きな収入をもたらした。

大径木が、建築材のほか樽丸*たるまるに加工されたことは、すでに記したとおりである。製材したら出る端材・廃材はいざいも重要な商品だった。大きな板や柱はとれなくても、経木や菓子箱かしばこ、野菜箱、かまぼこ板、神具*さんぼうの三宝*さんぼうなどになる。割り箸産地の下市*は、実は三宝の産地でもある。そうした端材・廃材利用の中でも小さな端材から作られたのが割り箸だ。最後の最後まで木材を利用した最終商品なのである。しかも木材の量に比して高価格で売れた。

つまり吉野林業は、廃材の利用技術で成り立っていたといっても過言ではない。だからこそ、割り箸は吉野林業の象徴的な存在であり、林業の真髄と言えるではないか。

このような多岐たきにわたる商品開発が行われた理由はいろいろ考えられる。しかし、やはり山のものは一切無駄むだにせず利用しなければ「もったいない」という精神風土があったからだと思う。割り箸はその精神を代表している。

一般の林業地でも同じだ。森林から伐りだす木を、建築材、それも柱材だけといった単体の商品にしていると、森林経営としては片翼飛*かたよくひ行こうであり収益は上がらない。捨てることなく商品化して、初めて林業が産業となれるのだ。

ところが現在は、従来の間伐材や端材から作った商品が売れなくなってしまった。かつては木製品だった身の回りの建築物や家具、道具類が、金属やコンクリート、ガラス、プラスチックなどの素材に置き換かわってしまったからだ。そのため大径木の太くてまっすぐな部分だけを抜き取って商品にしている。

大雑把おろそかな計算だが、根株ねぐらや梢しやう、枝を伐り捨て、太い根元の丸太だけを伐出ばいしゅつして、製材加工の際には端材を捨て、柱も建築の際に寸法に合あわせて切り……としていっていると、結果的に一本の樹木のうち、本当に使われるのは一割程度だったことがある。

たとえるならば、^④大きなホンマグロを釣り上げたのに、食べるのはトロの部分だけ。赤身は捨てているに等しい。いくらトロの身が高くて、それでは漁獲ぎょかくするためにかけた経費を賄い、漁師の生活を維持いじすることはできない。

現在、日本の林業は不振ふしんを極きわめている。その理由は、すぐに「安い輸入材」のせいにされがちだが、^⑤それは大きな勘違いだ。時代に合った木材商品を開発できなかったことも重大な要因なのである。

その中で割り箸は、端材商品の最後の砦とりでと言えるかもしれない。それも失うようだったら、本当に日本の林業は壊滅かいめつしかねない。

(中略)

改めて割り箸と森林問題を振り返ると、「風が吹けば桶屋が儲かる」的な発想で登場したものだ。

多くの人は、森林が危機だと聞けば、木が減っている、だから木を伐るのに反対し、目先の木製品を使わない方がよいと考える。少しでも木を使わなければ、伐られる山の木の量が減る、木を伐らなければ森は守れるし、森林があれば二酸化炭素の排出は減る……このような連想が働く。その末端に、割り箸も引っかけたのだ。

しかし、環境問題をあまり単純化して考えるのは危険である。実際の自然環境や社会の仕組みは複雑で、何がどこに影響を与えるか一概には言えない。一つの行為には多岐にわたる背景と複雑な関係が潜んでいる。(中略)

何がどこに関わっているか、十分に解明できないケースも少なくない。それを単純化した発想で行動を起こしても、望んでいたような結果を生むとは限らない。

⑧ 実際に、環境によかれと思っ行って行った行為が、思いもかけぬ結果につながったことも少なくない。

A たとえば害虫を殺そうと殺虫剤を撒いたら、害虫の天敵も殺してしまうことが多い。また害虫が、薬剤への耐性を身につけて薬が効かなくなることも起こっている。そうになると、殺虫剤を撒けば撒くほど害虫が大発生するという事態になりかねない。

B ある特定の植物、あるいは動物を保護したことで、そのほかの動植物が圧迫される事例も少なくない。荒地を緑化しようと、生長の早い草や木を外部から持ち込んで植えた場合、在来の植物を圧迫する可能性がある。これまでなかった植物が繁茂することで、生息する昆虫も変わるだろう。そして悪影響を広げてしまうこともあるのだ。

C シカを保護しようとオオカミを駆除したら、増えたシカは草を食べ尽くして、飢えて大量死したケースもアメリカで起きた。

D リサイクル活動も、十分に考えたうえで行わないと逆効果になる。たとえば再生紙を作るには、紙を繊維にもどすために莫大なエネルギーを消費するとともに、漂白のための薬品類も必要とする。その排水の処理にも、馬鹿にならないコストがかかる。リサイクルすることによって資源の無駄遣いを抑え環境を改善しようという思いとは別に、往々にして、その過程で多くの環境負荷を生じるのである。

食品の添加物は危険、農薬は危険、といった指摘も、添加物を使わないことで品質の劣化が早く進んだり、無農薬だと虫の食害のため人々の口に入る前に破棄する食物が増える可能性の方が高い。逆に特定の食物の機能性に注目が集まりがちだが、それが極端になると、これさえ食べていけば癌が治るとか、ダイエットできる……という話になる。こうした短絡思想は、結局何もたらさないだろう。

結局、どんな行為でも、そこには必ず利益と不利益が生じる。片方だけを取り上げるのではなく、両者を比べて、どちらが総体として有利か十分に検討する必要がある。そんな大きな視点を持って判断しなければ、環境問題は理解できない。森林と人間社会の関係もその中には含まれる。

割り箸も、その大きな広がりや密な結びつきによって存在していることを忘れるべきでないだろう。たかが割り箸、たかが塗り箸だが、それらを通して世間を見たら、新たな世界が見えてくるかもしれない。小さな木片の後ろには、大きな地球環境と人間社会が広がっているのだから。

私は、何も割り箸が絶対に必要だと決めつけているわけではない。もしかしたら日本人の食生活自体が大きく変化して、割り箸が廃れて消えてしまう時代が来るかもしれない。それが時代の流れなら、私はとくに抵抗しようと思わない。

しかし、間違った認識で割り箸が攻撃されるのは不本意である。また割り箸を取り巻く歴史や文化が失われるのは残念だと思っている。何より割り箸自体の価値を、私は高く評価している。

小さな木工品が、日本の山を考え、世界の森林を想像し、環境問題までに思いを馳せるきっかけになれば、幸いである。

(田中淳夫『割り箸はもったいない?』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) * 吉野林業……奈良県の吉野川上流の地域で行われている林業。長年日本の林業の模範とされてきた。吉野杉の産地として有名。

* 間伐……「主伐」の対語で、主伐に至るまでの途中で行われる伐採。森林が混みすぎて不健全になるのを防ぎ、良い木を育て森林の価値を高める作業。

* 大径木……幹の径が太く育った、樹齢の長い木。

* 主伐……一定の林齢に生育した立木を、用材等で販売するために伐採すること。

* 樽丸……酒樽に用いる木材。

* 三宝……神仏に物を供えたり、儀式の時に物を載せたりするのに使用する供物用の台。

* 下市……奈良県南部の町、下市町。吉野地方の主要商業地として古くから栄えた。

* 片翼飛行……本来左右両方ある翼が片方しかない状態で飛行することから、バランスの取れていないこと。

* 耐性……一定の薬物に対して示す抵抗力。

問一 ——— ①「現代社会の経済に馴染まない」という意見もある」とありますが、林業が「現代社会の経済に馴染まない」のは、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 林業は農業と違って、安定した収穫を見込めないから。

イ 林業は農業と違って、収穫量に比して利潤が低いから。

ウ 現代社会の経済は、短期間で成果を求める傾向にあるから。

エ 現代社会の経済は、確実に資金を回収することを優先するから。

問二 ——— ②「本来の林業はそうではなかった」とありますが、筆者は吉野林業を例に挙げて、「本来の林業」がどのようなものであったと述べていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 植える本数を多くしながらも、頻繁に間伐を繰り返して徐々に本数を減らすことで、一〇〇年後には見事に育った大径木の主伐によって、大きな収入を得ていた。

イ 植栽本数を多くすることによって節のない幹を育て、大径木に育つまでの長い期間にも間伐によって出る木材を有効に利用して、安定した雇用と収入を得ていた。

ウ 数々の商品に開発するためにあえて植栽本数を多くして、頻繁に間伐を行うことで大量の間伐材を商品化し、それらによって主伐でもたらされる以上の収入を得ていた。

エ 木を植えてから一〇年間は収入がないが、それ以降は木の成長に合わせて、細い間伐材から太い間伐材までをそれぞれ用途に応じた商品に開発して、定期的に収入を得ていた。

問三 ——— ③「森の産物を徹底的に利用し尽くす」とありますが、林業において、森の産物が「徹底的に利用し尽くす」されたのは、どのような考え方がその背後にあったからだと筆者は考えていますか。次の文の [] に当てはまる三十五字以上四十字以内の部分でこれ以降の本文中に求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

[] があったからだと考えている。

問四 ——— ④「大きなホンマグロを釣り上げたのに、食べるのはトロの部分だけ。赤身は捨てているに等しい」とありますが、これは、どのようなことをたとえているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「ホンマグロ」を林業に秘められた可能性にたとえて、「赤身」をその可能性を生かし切れていない現状にたとえている。

イ 「トロ」を林業がもたらす収入の全体にたとえて、「赤身」をその収入の大半を無駄むだにしている現状にたとえている。
ウ 「ホンマグロ」を樹木の中の太くてまっすぐな部分にたとえて、「赤身」をそれ以外の根株や枝のような端材はざいにたとえている。
エ 「ホンマグロ」を一本の樹木にたとえて、「トロ」をその中で最大の収入をもたらす太い丸太の部分にたとえている。

問五

——⑤「それは大きな勘違いだ」とありますが、ここから読み取れる筆者の考えはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本の林業の不振ふしんの理由を安い輸入材のせいにするのは単純な発想で、かつては間伐材を利用して作られていた道具類が別の素材おに置き換かわっていく中で、新たな木材商品を生み出せなかったせいでもあると考えている。

イ 日本の林業の不振の理由を安い輸入材のせいにするのは誤りであり、実際は、本来の林業のあり方を忘れて、目先の利益ばかりを追求してきた、現代日本の経済システムに要因があると考えている。

ウ 日本の林業がかつてに比べて不振なのは、国内産木材の代わりに輸入された安い木材によって、身の回りの家具や道具類が作られたいせいであり、それをただ一方的に非難してみても問題は解決しないと考えている。

エ 日本の林業がかつてに比べて不振なのは、安い輸入材のせいというよりも、時代の変化とともに人々ひとびとが「もったいない」精神を失ったせいで、山の産物を最大限に利用する努力をしなくなったせいだと考えている。

問六

——⑥「割り箸は、端材商品の最後の砦とりでと言えるかもしれない」とありますが、筆者が「割り箸」を「最後の砦」と考えているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 割り箸は、数ある端材商品の中でも木材の量に比して高価格で売れるため、不振にあえぐ林業を再生させる切り札となり得る商品だから。

イ 割り箸は、別の素材や安い輸入材では作ることのできない日本固有のものであり、古くから日本林業の象徴しょうちょうてき的な存在と言える商品だから。

ウ 割り箸は、林業に不可欠な間伐材利用の最終商品であり、木材を捨てることなく商品化してきた日本林業の精神を代表している商品だから。

エ 割り箸は、小さな木工品とは言え、長い期間をかけて生育された貴重な森林資源であり、日本の食文化にとっても欠かせない商品だから。

問七 ——— ⑦「その末端に、割り箸も引っかけた」とは、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 森林問題を解決するための手段を次々と考えていった結果、割り箸の使用をやめるべきだという最終的な結論にたどり着いたという
- イ 森林問題が生じる原因を次々とさかのぼっていった結果、割り箸の使用もその原因であるとしてすぐに結び付けられてしまったということ
- ウ 森林の危機という大きな問題を解決するためには、まずは割り箸の使用を見直し、身近なことから始めるべきだと誰もが考えたという
- エ 森林の危機を救うための方法を考えていく過程で本来の目的がすり替わって、割り箸にまで議論の矛先が向けられてしまったという

問八 ——— ⑧「実際に、環境によかれと思って行った行為が、思いもかけぬ結果につながったことも少なくない」とありますが、次の表は、本文中のAからDの4つの【事例】について、「よかれと思って行った行為」【意図・行為】、「思いもかけぬ結果」【結果】と、なぜそのような結果を招いてしまったのか【要因】をまとめたものです。これについて、次の問いに答えなさい。

	【事例】	【意図】	【行為】	【結果】	【要因】
A	害虫と殺虫剤	害虫を殺そう。	殺虫剤をまく。	天敵まで殺してしまい、害虫が大発生する。	殺虫剤が害虫だけに効くと早合点していたから。
B	荒れ地の緑化	荒れ地を緑化しよう。	生長の早い草や木を外部から持ち込んで植える。	生息する動植物が変わってしまい、環境に悪影響を与える。	生態系のバランスを考えずに、植物の種類が変わっても環境が変化しないと誤解していたから。
C	シカとオオカミ	シカを保護しよう。	オオカミを駆除する。	増えたシカが草を食べ尽くして、飢えて大量死する。	（ア）
D	再生紙	（イ）	再生紙を作る。	莫大なエネルギーを消費するなど、かえって資源を無駄遣いする。	リサイクルされるもの以外に資源の無駄遣いが生じることを忘れていたから。

- (1) (ア) (イ) に入る文を、自分で考えてそれぞれ記しなさい。
- (2) AからDの事例と同じような出来事が、かつて中国で起こっています。農作物を守るために、農作物を食い荒らすスズメを大量に駆除したところ、逆に農作物の収穫が大幅に減ってしまったのです。なぜ、そのような結果になってしまったのでしょうか。この表を参考にしながら、考察できることを述べなさい。
- (3) これらのような「思いもかけぬ結果」を招かないようにするには、環境問題に対してどのような姿勢で向き合うべきだと筆者は考えていますか。本文中の語句を用いて、五十字以上六十字以内で答えなさい。

問九 この文章において筆者は、「割り箸」を通してどのようなことを主張していますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 割り箸を大量に使用することは森林破壊につながるので、小さな木片ではあるが大きな視点で考えなければならぬ。
- イ 割り箸の、資源を消費する木製品としての一面だけを取り上げて論じることは、環境問題に関する判断を誤る原因となる。
- ウ 環境問題を考える一例としてではなく、日本人の食生活との関わりから、割り箸自体について考えることが大切である。
- エ 割り箸は資源の無駄遣いの象徴としてではなく、それを取り巻く日本の歴史や文化の象徴として論じるべきである。

二 次の文章は、一九五〇年代の富山県のある町を舞台にした物語で、主人公「律」は十二歳の少女である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

ここまでがうちの敷地だという境界としてつくられた垣根は、生垣とよばれるもので、下半分は石をつみあげた、厚みのある石垣になっていて、そこに土をうめこみ、杉が植えられている。

それまでは、地面に直接置かれていた、石のお堂にはいったお地蔵さんは、石垣の上に、両わきを杉の木にはさまれるようになつこうですえおかれた。今までと同じように、道路がわに向け、正面に立山を見るような位置に。栗の木と、すこしはなれた同じならびで。

このお地蔵さんは、母、ハルの弟たちの供養につくられたものだ。祖母のヨシにとつては、息子たちで、亡くなったのはずいぶん前だけど、今でも母とヨシばあちゃんとは、ときどき手を合わせているし、近所の人も手を合わせているのをときどき見かける。

かやぶきだった屋根が、瓦にふきかえられたのも、このころで、この生垣と瓦屋根で、わがやはずいぶん、ていさいがよくなった。

律は生垣の内がわで、栗の木が道路のほうに枝をのばすのを、ききわけのない子どもが、勝手な行動をとるのを見まもる親の心情でなごめ、道路に実をおとすと、その子がしかしたいたずらの、後始末でもするように、いそいそとひろい^①にいった。

道におちている分をひろい集めたあと、ゆっくり安心して、敷地内、つまり生垣の内がわにおちた分をひろう。ざるにいっぱいになることもあれば、十個ほどしかとれないときもある。

それを台所においておくと、学校から帰ったころには、ヨシばあちゃんがゆでておいてくれるというわけだ。

いつもはねぼうな律が、栗の季節になると、夜明けとともに起きだすものだから、家族はだれもが、律はよほど栗が好きなのだろうと思ひこんでいた。

じつは、人にとられるのがいやな、ただのよくばりでケチンボなだけだ。でも、そう思われるのがはずかしかったから、あえて否定せず、そのままにしておいた。

早起きといたって、どのみち栗が落ちる時期は、せいぜい二週間ほどで、その間だけ、ちよつとがんばればいいのだし、本来ひろうのが楽しいのだから、ちつとも苦ではなかった。

前の晩に風がふいたりすると、明日の朝はどんなにたくさん落ちていようかと、わくわくしたものだ。

栗はもちろん、律が学校にいつているあいだの、昼にも落ちる。

枝の下で見上げてみて、ぱっくりと開いた緑色のイガの中に、つやつやした栗の実が、今にもこぼれ落ちそうになっているのを見つけたとしても、それは落ちてくるのをまつしかなく、タイミングよく、そこを通りかかった人がひろったとしたら、それはそれでしかたがないと、あきらめるしかない。

そういう「賭け」みたいなところもあったから、律はつい、栗ひろいに夢中になってしまったのかもしれない。

(中略)

その朝、はちあわせしたのは、律より少し年上の少年だった。制服と帽子で、中学生のようだ、ということぐらいはわかったが、はじめて見る顔だった。

こんな時間に、もう通学なのだろうか。それとも、新聞配達でもしていて、その帰りなのだろうか。生垣にたてかけるように、自転車が止めてあった。そのころ、新品の自転車にのっているのは、よほどのお金持ちしかいなかったから、まあ、ふつうのポンコツっぽい自転車だった。

ざるをもってあらわれた律を見て、少年はハツとしたように立ちつくした。

ものすごく、バツが悪かった。

うちの栗をひろうのに、なんで律がこんなに、居心地の悪い思いをしなければならないのか、自分で自分に腹が立つほど。

本当はにげてもどりたかったけど、そんなことをするのは、もっとバツが悪いので、なんとかがんばってふみとどまり、律は無言で、栗をひろいはじめた。さっさとひろって、早くもどうろう……と思っっているのに、こういうときにかぎって、たくさん落ちているのだ。

「このうちの人？」

と、彼はいった。あまりきいたことのない標準語で。律は顔をあげずに、小さくうなずいた。どうりで、こぎれいで都会っぽい雰囲気^{ふんいき}がただよっているわけだと、納得しながら。

いっぽうの律は、姉たちのおさがりの、よれよれ寝まきと、足にはすりへった下駄^{げた}、頭はぼさぼさ……。朝早いうえに、寝おきだからというわけではなく、律のかっこうはいつだって、だいたいこんなようなものだ。顔がこんなに熱いから、きっとほっぺたはまっ赤だろう。絵にかいたような、いなかの子。

「もういいい？」

また 1。だめといえるはずもなく、だいいち、たとえだめだと思っっているにしても、それをどうやってつたえればいい？ 律は、方言以外では話ができない。

「この前も、一度、学校の帰りに通りかかって、ひろったんだ」

2 まま「ふん」とだけ答えた。

「この栗、おいしいね。これまで食べた栗の中で、一番おいしかった」

律は思わず 3。その瞬間^{しゆんかん}、律は、うちの栗が大好きになった。けれども、

「ふん」

なさけないことに「ふん」しかいえない。

「ありがたい」

彼は、両手にいっぱい栗を、学生服のポケットに入れ、立山に背を向けて、このごろ宅地が建てこんでいる方向へと、自転車でさっ
ていった。彼のすがたはすぐに視界から消えたけれど、記憶にやきついたその笑顔がまぶしくて、律はいつまでも目をほそめていた。

その日から、栗の味が変わった。毎日食べていた、同じ栗なのに、世の中にこんなにおいしいものがあるのかと思うほどおいしい。
彼はそれつきり、栗の木の下にあらわれることはなかった。

期待しないでおこうとは思いつつも、律は寝ぐせのついた髪をとかし、寝まきより少しはましな服に着がえて外にでるようになったが、毎
朝、がっかりした。たとえあらわれたとしても、話なんかどうせできなかつたのに。

もちろん、このことは家族にも友だちにもだれにもいわず、自分だけの大切な秘密としてかかえこんだ。そして、上等なあめを口の中でこ
ろがしながら、ゆっくりと楽しんで味わうように、何度もうつとりと思いついにひたつた。

妄想や空想の中では、いいたいことはいっぱいあったし、なんでもいえた。

「道におちとるもんは、だれがひろてもいいがやぜ」
と、教えてあげたかつたし、

「おいしかろ、この栗。わたしも大好き」

と、ちよつとしたうそをついてもよかつたし、

「また、とりにきて」

そうさそつてみてもよかつた。

じつさいには、ぜつたい、いえつこないことばかりだったというのに、律はあまつたるい後悔にひたつた。

(中略)

うちはいわゆる兼業農家で、田んぼはおもに母のハルと祖父の栄太郎じいちゃんの担当で、父の忠直は会社勤めをしながらの、休みの日だ
けの働き手だ。琴音ねえさんは、結婚したら仕事をやめて家庭にはいる予定だけど、今はまだ市内の会社で事務職についており、仕事が休み
の日曜日は農作業にかりだされる。高校生の歌子ねえさんや、律にも、年齢相応の手伝えることは、いつもたくさんあった。

そういうときでも、ヨシばあちゃんもつばら、台所などの家事を担当し、父や姉たちや律は、あくまで手伝いで、農作業の中心は栄太郎
じいちゃんと母のハル、どちらかというと母だ。わがやは、ハルかあちゃんまわっている。

母はじつさい、よく働き、たくましく、力持ちでもある。

耕運機を動かす女の人は、この村では母だけだ。

そんな母でも、むすめ時代は歌を歌うことが大好きで、音楽の先生になりたいという夢があったのだと、律たちは何度もきかされている。早く結婚して、すぐに子どもができて、夢はかなわなかったけれど、あんたたちが夢のかわりだから、あんたたちに、音楽にちなんだ名前をつけたのだ、と。

何回もきいた話だけど、信じられない。見るからに、いなかのおつかさんという感じの母が、音楽の先生になりたかったなんて。うちにはピアノもオルガンもないのに。

母もそのへんのところは心得ていて、「音楽の先生」という言葉を出すときは、つんと気どったポーズをとる。律たちが、ドツとわらうと「なに、おかしい？」と、わざと怒おこってみせる。律たちは、「なあんぜんぜん」といいつつ、またドツとわらう。

⑥ 母、ハルは、そんな人だ。

律は、そういう母を、表向きでは「口うるさい」だの「いなかくさい」だの「かあちゃんみたいにはなりたくない」だのと、反抗はんこう的なことをいいつつも、心の底では、ちょっとかっこいいとも思っている。母は、律には「女の子らしくしろ」といつもいうが、母こそ、男まさりで、そのことに自分で気づいていないのだ。

(中略)

その年の大みそかのことだ。

(中略)

お堂の中の、お地藏さんのちょうど前に、大型のマツチ箱ほどの大きさの、長方形の木の箱がおいてあるのに気づいた。

(中略)

ここにままごとの道具のようなものとはいえ、おさい銭箱ができてみると、このお地藏さんの格があがったように見えた。

「でも、だれ、こんなこんなものをつくったの？」

といいつつ、琴音が思い出したように、もってきたぞうきんでお堂の中のそうじをはじめた。律もわれにかえって、お地藏さんをふくことにした。

「お地藏さん、教えて」

歌子がおどけて、お地藏さんをのぞきこんでたずねかける。

だれがつくったのか、律には、心あたりがあった。

きつと、あの少年だ。

ほかにだれがいる？

栗のお礼なんだ。そうにきまっている。

(中略)

「どうしたの、律。ほつぺたがりんごみたい」

歌子にいわれた。

「あつて……」

頭に雪をかぶりながら、律は顔をぱたぱたとのひらであおいだ。

「へんな律」

「そお？」

ふたりの姉たちが、ぷつとふきだした。

「そお？ やつて、なにをきどつているの」

⑦「だって、うれしいよ。うちのお地藏さんに、こんなにつくつてもろて。うちのお地藏さん、えらなつたみたいで」

律はしどろもどろでいった。律の返事は、姉たちの質問の答えになつていなかったが、律の意見にはふたりとも「ほんとにそうやねえ」と、深く同意してくれた。

そうじが終わつたお地藏さんに、律は手を合わせ、心をこめておまいりをした。

(杉本りえ『100年の木の下で』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

問一 ———— ①「いそいそとひろいに行った」とありますが、この時の「律」の様子の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答

えなさい。

ア 栗の木が周囲の迷惑になるほどに実を落としたのを、まるで子どものいたずらのようだと思ひながら、いらだたしそうに栗をひろいにいく様子

イ 栗の木が道路にまで落ちるほど実をつけたことを、子どもの成長を誇らしく思うような気分で眺めては、得意そうに栗をひろいにいく様子

ウ 栗の実が敷地の外にまで落ちるので、人にひろわれないようにするのは手が焼けることだと思いつつも、楽しそうに栗をひろいに行く様子

エ 栗の実が自宅の外の道路に落ちてしまったために、近所の人に先にひろわれてしまうのではないかとあせって、あわただしそうに栗をひろいに行く様子

問二

②「少年はハッとしたりしたように立ちつくした」とありますが、この時の少年の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 朝早ければ誰もいないと思っていたのに、栗の実を盗んだことがざるを持った女の子に見つかってしまい、気が動転した。

イ 知り合いに田舎の子があまりいないため、栗を拾いにやってきた女の子を見てそのだらしない姿に驚きあきれた。

ウ たくさん栗を持ち帰ったのに、ざるをもった女の子と出くわして、二人で分けなくてはいけないと思つてがっかりした。

エ 栗の木の持ち主の家の子どもと思われる女の子が現れることは全く予想していなかったため、ひどくおどろいた。

問三

③「顔をあげずに、小さくうなずいた」とありますが、この時の「律」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 話しかけてきた少年の言葉遣いや雰囲気、みすばらしい自分とはかけ離れていてひきめを感じている。

イ 知らない少年に耳慣れないきつい口調で質問され、不審に思われているのだからかと感じて緊張している。

ウ 知り合いでもない少年が親しげに話しかけてきたため、彼を無礼でなれなれしいと感じて警戒している。

エ 栗を早く拾いきって帰りたいのに少年に話しかけられたため、話を長引かせたくないと考えて焦っている。

問四

1 から 3 に当てはまる語句として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 下を向いた イ 顔をあげた ウ 腹が立つ エ 首をふった

オ 声をあげた カ 小さくうなずく キ 立ちつくした ク 目を閉じた

問五

- ④「このこと」とは、どのようなことを指しますか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 以前よりもましな格好をして外に出ていること
 イ 毎朝外に出ても期待外れの結果になっていること
 ウ ある日票を拾ったときに少年と出会ったこと
 エ 最近票をおいしく感じるようになったこと

問六

- ⑤「あまつたるい後悔」とは、どのような気持ちですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 少年と次に会ったらちゃんと話せるだろうという期待と、一度チャンス逃した不甲斐なさの入り混じった気持ち
 イ 少年との会話を想像して感じる淡いときめきと、彼ともつとましく話したかったという思いの入り混じった気持ち
 ウ 少年と偶然に出会えたことに対する喜びと、彼とはおそらくもう会えないのだという寂しさの入り混じった気持ち
 エ 少年にかける言葉を想像することの楽しさと、彼に嫌われるようなことをしてしまったという反省の入り混じった気持ち

問七

- ⑥「母、ハルは、そんな人だ」とありますが、「ハル」の様子や人柄を述べた文として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 律にとっては反抗したくもなる口うるさい存在であるが、陽気な冗談で笑わせてくれる一面もある。
 イ 自らは台所仕事で「ヨシ」に任せているのに、娘には家庭的で女の子らしいふるまいを求めている。
 ウ 本人は自覚していないが、男勝りでたくましい働き手であるところを、「律」にはかっこいいと思われている。
 エ 今は農業に専念しているが、結婚前には音楽の先生になるという夢があり、それを娘たちに何度も語っている。

問八

- ⑦「律はしどろもどろでいった」とありますが、「律」はなぜ「しどろもどろ」になったのですか。その理由を六〇字以上七十字以内で答えなさい。

問九

- この物語の内容や表現の特徴の説明として適当でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。
- ア 物語は、一貫して主人公「律」の視点から語られており、他の登場人物の行動や様子も「律」の視点を通して描かれている。
 イ 「律」と少年との出会いの背景には、宅地開発が進められるなど、当時の、地方の農村が都市化の波によって変化しつつある時代の動きがうかがわれる。

ウ 母から音楽にちなんだ名前を付けてもらった二人の姉「ことね琴音」と「歌子」は、その名前の通り明るく活発な人物として、「律」とは対照的に描かれている。

エ 「その日から栗の味が変わった。」という一文は、少年との出会いを境に「律」の内面が変化したことを印象づけるとともに、「律」の少年に対する好意やあこがれを象徴しょうちやうしている。

オ 「律」が少年のことを思い出す場面では、「律」の心の中のつぶやきがそのまま書かれているが、それによって、彼女の内気かのじよで夢見がちな少女としての一面が伝わってくる。

カ 物語の初めでは、お地蔵さんのことをまったく気にかけていなかった「律」だが、少年がおさい銭箱を作ってくれたことをきっかけに、初めてお地蔵さんを大切に思うようになる。

三 次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 先生のオンジョウに報いる。
- ② 足をぶつけてゲキツウが走る。
- ③ ザぶとんを差し出す。
- ④ ハイは重要な臓器の一つだ。
- ⑤ 彼は医者かれのタマゴだ。
- ⑥ ほおをコウチヨウウさせて走る。
- ⑦ 説明が目的をイる。
- ⑧ 王様にツカえて十年たつ。
- ⑨ 車窓から景色をながめる。
- ⑩ 教育に従事する。
- ⑪ 老若男女
- ⑫ 米食こそ日本の味だ。